

【資料紹介】

平尾魯仙『画訣』と魯仙の作画態度

本田 伸

幕末から明治初めの弘前城下において、津軽国学グループの立ち上げにかかわった平尾魯仙（一八〇八〜八〇、魯僊、宏齋、蘆川齋）は、津軽画壇に重きを成した画家であり、和歌・俳句・漢詩に長けた文人であった。その画業や著作は、中村良之進編『平尾魯仙翁』（昭和四年）に詳しく紹介されているが、散逸したのもも多く、全体像は未だ明らかになっていない。

魯仙は、弘前市・高照神社「甲州廿四将図」や鱈ヶ沢町・高沢寺「十王図」のような大作から、四冊の「画帳」（弘前市立弘前図書館蔵古図書保存会文庫）にみえる植物画の佳品まで、山水・人物・花鳥風月を描き分ける自在さを持っていた。その技術や創作態度を知る上で重要と目されるのが、『画訣』である。書名は中国の宋代に起こった南宗画の用語にちなんだもので、「絵画の秘訣」という意味である。

本書は、末尾に「文鳳の漢画独稽古のうつけ」とあるように、魯仙独自の画論書というわけではない。魯仙は、文化四年（一八〇七）刊行の『漢画独稽古』を底本として、主だった箇所を引き写したり、自分なりに筆を加えたりして、『画訣』を仕立てたようである。

「文鳳」は河村文鳳のことと思われるが、彼が刊行したのは『漢画指南二編』（文化八年刊、建部綾足の遺稿集『漢画指南』の続編というべきもの）である。『漢画独稽古』の編者は宮本君山であり、魯仙は編者名を取り違えたようだ。しかし、魯仙が『漢画独稽古』を底本に選ん

だのは、その内容に共感を覚え、そこから多くを学んだためであろう。冒頭の「文章と絵画は表裏一体のものである」という一文は、幅広い教養を追い求めた魯仙の生きざまに通ずるものがあつたといつても、過言ではない。

『漢画独稽古』は乾坤二冊からなり、その記載項目は次の通りである。

【乾】 ○総論 ○写生法 ○写意飛鶴之図

○写生位置 ○山之皴法同図 ○樹之点法同図 ○写意之人物図 ○倭画漢画之論 ○絹幅上幀子法 ○絹本濃漿并炭道描様 ○朽木之拵様 ○画之描様 ○絵具之解様 ○合調絵具之題名 ○筆墨絵具用法

【坤】 ○山水之写生論 ○山水之名目 ○平遠山水之図 ○山水六遠之論 ○画南北之訣 ○四季雑山水之画題并山水之図 ○花鳥之画題 ○写生小鳥之図 ○百梅之画題并雙清之図 ○人物十分之図 ○画器之図

これを『画訣』と比較した場合、『画訣』では、『漢画独稽古』の本文中の細目を項目に立てたケースがあることが分かる。例えば、『画訣』にみえる「落款」「印」「画辞」の項目は、『漢画独稽古』では「筆墨絵具用法」の細目として乾巻の末尾に置かれている。魯仙がどの項目を取捨選択し、移動したかは、項目の単純な比較だけではつかめないもので、注意を要する。なお、『漢画独稽古』の豊富な図版は、『画訣』ではすべて省略されているが、「写生盤図」「写生帖図」に付けられた説明書きだけは、『画訣』に写し取つてある。西洋流の新技法として、魯仙の興味を惹いたのであろうか。

『画訣』の概要は次の通りである。

○画摠論

写生を重視すること、先学の画譜や画伝をよく学び、運筆の鍛錬を重ねることが、道を成すために肝要であるとす。流行を追うこと、一部を見て全体を知つた気になることを戒め、人真似ではない独自の境地に至ることが最上とする。

○写生法

写生においては「用捨」、すなわち主題決めと省略を重視すべきで、すべてをありのままに写せば良いというものでもない、とする。

○写生位置

図取り、すなわち、描き初めの構図決めが大切であるとす。ここでは、山水画の重要な技法「皴法」に詳しく触れている。「皴」は「皴」の意で、墨のタッチにより岩石や山岳の陰影・質感・量感を表すやり方である。宋代に形式化が進み、それぞれの画家・流派と結びついて、披麻皴（渴筆により筆線を麻の繊維をほぐしたように波打たせ、山や岩のひだを表すもの）・斧劈皴（鋭い側筆で、斧で割つたように峻厳な山肌や岩面を表すもの）など各種の名称が与えられるようになった。

○倭画漢画論

日本画の歴史をたどり、中国絵画との関わりを簡潔に述べる。画家として学んでおくべき教養を示したものである。

○落款 ○印

落款の位置、印の種類、印材について述べる。

○画辞

臨写・摸写・粉本・縮写といった形式分類や、ドウサ紙、筆・硯・筆洗・墨・朱肉・絵具・膠

水などの画材まで、絵を描くのに必要なさまざまな要素について述べる。

○山水の写生

中国の画人と山水画の関係について述べる。

○画訓

一つの山も見方によってさまざまな描き方ができるのだから、その趣の違いを感じ取り描き分けることが大切である、と説く。宋の郭熙の画論書「画訓」を参考にすることを勧めている。

○山水の名

山の形状に関する用語と定義について述べる。

○三遠

山水画における遠近法について述べる。平遠・高遠・深遠の三遠法は郭熙が提唱し、のちに韓拙が闊遠・迷遠・幽遠を加えて六遠法としたというのが一般的な理解だが、『画訣』は、もともとの三遠法に郭熙が闊遠・迷遠・幽遠を加えた、と記している。しかし、郭熙（郭熙の子）が父の言行をまとめた画論「林泉高致」に六遠の語はなく、平遠・高遠・深遠の三遠にしか触れていない。これは、底本である『漢画独稽古』の混乱である。

○画南北の訣

南宋画と北宋画の違いについて述べる。南宋画は簡略を主とし、北宋画は繊細・精密を主とすると思われるが、そうでない場合もあるという。先入観への戒めと言えよう。

○山水画題

あらかじめ画題を設定してから絵を描くことはよくあるが、絵そのものが題に縛られては趣がなく、文に表れない余情をも表現してこそ題も生きる、と述べる。以下、春・夏・秋・冬・

雑の項目に従って代表的な画題を掲げ、それぞれの題意について解説を加えている。

○花鳥画題

花鳥画と「見立て」の関係を述べる。写生を重んずる山水画にくらべ、花鳥画はすべからく寓意がこめられるもの、という理解であろうか。

○顔色具

画材について詳しく書かれているが、ここでも一例として「猩胭脂」（猩胭脂・腥胭脂・生胭脂とも）を採りあげてみたい。胭脂（エンジ）は黒みのある濃い紅色のことで、紅花の一大産地である中国の燕支山（胭脂山）にちなんだ名である。紅花や蘇木を原料とするもの、カイガラムシ（エンジムシ）から抽出した色素を原料とするものがある。日本には、アジア産のラックカイガラムシからとった「紫鉱」が奈良時代に伝来し、正倉院に現存している。江戸時代には、紅花や蘇木などの汁を綿に含ませた「綿胭脂」のかたちで輸入されていた。川合玉堂『日本画実習法』（昭和二年）に、この綿をほぐして熱湯に通し、湯煎してから乾かすと、乳液状のものが残るとあるが、『画訣』に記された猩胭脂の使用法も、ほぼその通りである。

○熟字

日本画における用語集というべきもの。『漢画独稽古』から摘記した用語に、魯仙が注釈を付けたのであろう。

『漢画独稽古』をみると、中国の清代に刊行された彩色版画集『芥子園画伝』の影響がみてとれる。その内容上の問題点については古原宏伸氏が言及しているが（『芥子園画伝初集』解題）、同氏『中国画論の研究』中央公論美

術出版（二〇〇三年）、歴代の画論や画法を集成し、諸物の描き方を豊富な図版を用いて解説して、一種の教科書的作用を果した功績は、一般に認められている。それゆえ、元禄年間に日本へ伝えられると、日本画を学ぶ者はこぞつてこれを求めた。魯仙は『漢画独稽古』を写す過程で、『芥子園画伝』はもちろん、郭熙「画訓」や狩野永納「本朝画史」といった日中の絵画書に関する情報を得たことであろう。

物事を徹底的に調べ上げ、画業に活かそうとする魯仙の態度は、周辺に影響を与えずにはおかなかった。前出の『平尾魯仙翁』にみえる弟子たちの回顧談には、魯仙の人物像の一端がのぞいている。例えば、山上仙室（魯山）は、「絵を描くのに必要なのは筆でもなく、絵具でもない。ただ、その人の人格である」と述べているが、何事も真摯に向き合うことの必要性を説く姿勢こそ、仙室が魯仙から学びとった最上のものであろう。また、青森在任の佐藤部（仙之）は、「武者絵はずさん」と今村慶寿に酷評された魯仙が、「慶寿の六歌仙の絵は彩色が良い」と言って教えを請い、ついに賞賛を勝ちとった、というエピソードを語っている。

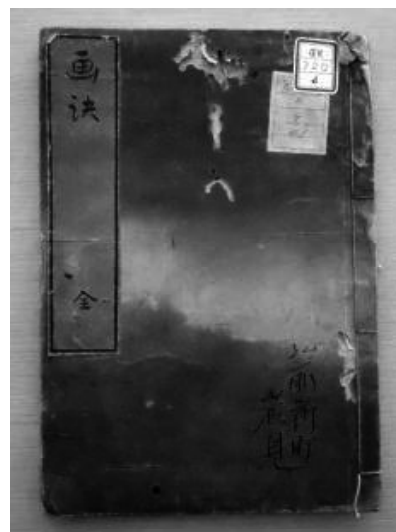
【凡例】

- (1) 傍注は、字句の脇に（ ）で示した。
- (2) 文中の句読点は筆者による。
- (3) 本文中の割り書きは、最後の「熟字」の項のもののみ「」書きで示した。

【所蔵】弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫

GK七二〇—四「画決」

なお、題箋二字目は「決」ではなく「訣」のくずしであるため、本稿では『画訣』と表記した。



(表紙題箋)
「画訣 全」

画摠論

夫、画は四芸の一にして、これを有形の詩と云て、咫尺のうちに万里の風煙を写し、方寸の中にも千尋の峻壁をも形容す。詩ハ亦無形の画と云て、音の響を以て画の氣韻生動を述るなり。すへて言ば、及ひ施しかたき処を以て画を以てこれを補ひ、又、画の尽し及ハさる処を以て詞を以てこれを補ふものなれば、詩と画とハ陌を同うすへし。文雅の志ある諸彦ハ画を学すんハあるへからず。其、画を学ふことハ難もあらず、又、易きにもあらず、唯学者の心の置処と標準とする処に巧拙ハ有なり。先画を学んと思ふはしめにハ、画法も規矩も論せず、粉本も不用。只、画ハ衆物の形象を多かくものなれハ、乾坤の内に形有ものハ皆我か粉本なりと思ひて、山を看てハ山を写き、樹を見てハ樹をかき、花を看てハ花をかき、鳥を看てハ鳥を写き、何にても我心に欲物の生物を粉本にして、紙面に其生物の形容を写き、又かきてハ自らなをし、直して

ハまた写し、一種の草花にてもいく度も写し、遍を重ね度を積て筆を練り手を熟め、大概品数二・三百種も写生すれハ、自然と筆を執て腕つよく、我か心の思ふまゝに筆左右で、滞ほることなきやうに成なり。左すれハ、渾成自然の条理其中に備りて、皮・肉・骨も自ら分るやうになる也。画ハ技芸にて、わざごとくなれハ、運筆の独り擅まゝなるを第一として、而後に世鳴巧者の説をも聞、古人の画をも見、諸画譜或ハ画伝等も見たり写したりして、画法の規度森嚴なる事をも知て、百鍊千鍛の功を積て、後にハ妙を極めて、名譽画ともなるべき也。近日流行画の氣習にて、纔に蘭の葉・菊の花を描覽るや否やに規矩を争ひ画法を論するもの、世に少からず。尤唐山にてハ行家建幃の画、文人韻士の画といふ差別もあれとも、是皆古人の範圍にかゝはり縛らるれハ、必其言に眩ふへからず。古人の法に泥て描にあらす、只我一箇の標準より思ひつきて作すこと也。然共全く法を捨ると云にハあらず、素より古への名譽人にハ法の沙汰なし。天然自然の画にて、衆物の表裏精粗に至るまで、よく物の性情氣韻をうつし其理を究めたるものなれハ、天然自然条串ありて分曉なるか如し。後の学者、其中に就きて自然の条理を法と定めたるものなれば、其法と云も無法の中に寓す。且、其法たるや繁にして究むへからず。故に空論なし。只我か悟るところを重貴する也。左あれハ画法と云も画論と云も、只此芸に巧なる人々の描たる規矩、言たる言なり。我もまた此芸に熟し絶妙神品の場に至らば、また後の人の規矩にもならんと思ひて、まつ画を学ふはしめにハ、無法より起りて法に

入り、有法ミちて後に又、無法に帰ると言り。鹿柴氏曰「有法可、無法亦可、唯先埋筆成塚、研鉄如泥」と云り。此故に百鍊千鍛の功をつミ、筆をこらし、氣をはけミて学へは、我にありて人に求ることなし。

写生法

花鳥・人物・山水に限らず、凡て写生をするには、まつ用捨と云て、省捨るところと用ゆる処の顔目を取るを專一とするなり。顔目ハその一図の主とする処也。譬へハ山崖に掛泉有を見て其風景佳と思ひ、是を写生せんと思ハ、其掛泉をその景の顔目として、位置を起して写生する也。海浜の漁村、沖に焚いさり火、或ハ宮殿・樓閣・流水・橋梁・奇峯・連山等、ミな其風景の最探て顔目として、其余の景色ハあしらいに用る意也。たとへハ梅の枝ハ左右に蔓り、一枝に黄鳥のとまりたるを見て、其意を写生せんと思ハ、其一枝の黄鳥を顔目として写生する也。其余の枝ハ省捨ると云にハあらず共、只あしらいに用ひ写す也。その梅の樹の左右へ蔓りたる枝条を、ミなことゝ有のまゝを写生すれハ、肝要標準にする顔目の意を失ふ也。また、黄鳥一羽の中にも又顔目ありて、肝心の用る処をうつしとりて、其余のこさゝしたる処は省き捨る也。写生と云とも、強ちにありのまゝを生写するにもあらず、生意をよくうつる様に写すのミなり。又ハ山水の真景、人物の肖像等を写生するにも、只此話を工夫をなして彼の真面目を顕すへし。

写生位置

美濃紙或ハ薄やうなとにて図の如くなる帳帳をつくりて、毎日に懐にす。時にのそみて此山水の真景或ハ此花を写生せんと思ハ、まつ帳の紙面に心の内にて一図の経営を立て、此処をかふうつし、此枝をかふして彼の花を彼処へ入れ、此枝に此鳥をとまらせ、此花を根しめにするると写しに取りかゝらぬ前に心のうちにてしかと此紙上に布置をし、その後筆を下すへし。其思案もなく写生せんとすれハ、必一図の首・中・尾齟齬て、あともさきもつまらぬ様になりて図をなさす。是意匠経営を立てるの肝要とする処なり。山水・石・崖・鵬・塘などを写生するにハ、先皴を以て山の形象を写す也。皴ハ山の衣類にして、しハなり。其前後・向背・俯仰・重疊・屈曲をあらハす処也。其皴法一ならず。○披麻皴と云ハ、麻をむきたる皮を取り散らしたるやうなるしハ也。○乱麻皴、是ハあさの葉の風に吹ミたれたるやなるしハを云也。魯仙云、したれ乱麻ハ麻芋の乱たる形之図(写真)○大斧劈・小斧劈ハ、俱に大なる木を如此かた。



斧にてそぶり切たる体にて、其切口に段々ありてひとしからざるやうなるしハを云也。○荷葉皴ハ、蓮葉をうつふせにして、葉のうらより葉の筋を見るやうなるしハを云也。○荷葉皴ハ、明礬を何枚も積かさねたるやうなるしハなり。○

解索皴ハ、繩をときたらしたるやうなる皴を云也。○乱柴皴ハ、秋の末に紅葉の散乱れたるやうなるしハを云なり。○牛毛皴ハ、牛の背に皴のよりたるやうなるしハ也。是等の皴法ハミナ古人の書たるかたなり。此外に皴名多く有と雖、あとハミな少しつゝのちかひなれハ、爰に其あらましを出せり。さて、右の皴法によつて山を写生するにハ、未だ写しかゝらざる先に、此山ハ或ハ披麻皴にて写生するかよからん、彼の山ハ荷葉皴によく似たりと、能々皴を見立て、まつ写したる事也、云々。点法略。樹法略。

(※項目名「写意人物」欠落)

山の中にある人物を、写意人物、てんけいの人物とも云也、云々。生物の意を灑落にうつすを写意と云。

(※図版「写生盤図」「写生帖図」の説明)

写生家に、玉盤を以て移しとる法あり。又、阿蘭陀に写真鏡あり。又、山水を縮めうつすに窺境等の器物数品あれとも、皆蛮国の趣向の物ゆえに、真体を放るゝ事能ハされハ、風流氣韻の器にあらず。

倭画漢画論

我邦の古人ハ大低漢土の名画を学ひて、各々新意を發明して、一家の風を成せり。尤風韻なるものハやうく周文・雪舟の頃より起れり。藤ノ信実・鳥羽僧正の二子ハ漢土宋元の名跡を学ひて、俱に一家の風をなす。此法の世に行ハるゝ事既に久し。可翁・明兆及ひ如拙・周文に至て、方に精妙を得たり。其後又分て三家となれり。曰、土佐。曰、雪舟。曰、狩野なり。土佐

ハ倭画の専門也。雪舟ハ漢画の祖筆也。狩野ハ是漢にして倭を兼る也。各此支流世に行ハるゝこと、又すてに久し。故に名譽の人も又多し。然るに支流世に降り、人拙して流俗にうつり行て、古の漢土の風ハ既にすたれたり。近ころ享保・宝曆の頃より又漢画を学ふもの四方に起りて、名譽の人若干也。安永・天明の頃に至りてハ弥々熾にして、今や人文誠に富めり。

狩野元信ハ小名四郎次郎、始大炊助と称す。後越前守に任す。祝髪して永仙と号す。法眼位に叙す。世に古法眼と称す。曰狩野氏の宗とする処也。其学ふ処の山水ハ馬遠・夏珪・牧溪・玉澗・舜拳を学ひ、人物ハ梁楷・顔輝を学ひ、花鳥ハ趙昌をまなひ、倭画ハ藤信実・土佐光信か法に因て、其短を捨て長を取る。山水・人物・鳥獸・草木に至るまで尽妙を究めて神に容る。此支流にも友松・山楽・守信などの名人多し。藤原経隆ハ土佐守に任し、従五位下に叙し、繪所となる。是土佐守の元祖也。経隆か子藤原行光ハ越前守に任して、延文六年に繪所となる。行光か子藤原光重ハ又越前守に任す。明德元年に繪所となる。光重か子藤原広周ハ永享十一年に土佐守に任して繪処となる。広周か子光信ハ藤原氏の支別なれとも、家世々土佐を以て任官を譜代とすれハ、世人土佐を以て氏とす。光信ハ右近将監に任して繪処頭とす。明応五年に刑部太輔に任す。此子孫世に繪処とす。今ハ土佐土佐守といふ。僧雪舟ハ諱ハ等揚、また備溪斎と称す。備中赤浜の産也。州の井山宝輪寺の僧也。好て画をよくす。寛正中に大明国に渡り、四明天童に登り、第一座となる。雪舟云、我今此明国に遊ぶと雖、

画道に於て師とすへき人なし。只明国ハ名勝の地なれハ、山川草木、是我か師也。師ハ我にありて人に求る事なしと云り。大明の君臣共に其美を称す。朝に帰りて後、周防山口雲谷寺に居す。雲谷軒と号す。山水を善くす。人物を次とす。花鳥をまた其次とす。これ則長谷川家の祖也。漢土の画風によくかなへり。此支流にも名譽の人多し。あまねく世の人のしる処なれハ、此条に載せず。

漢画に南宗・北宗と云ことあり。南宗と云ハ今世にいふ文人の画なり。是禪家に比して、唐朝にはしめて宗を分てり。南宗の祖ハ唐の王摩結也。其画く処渲淡を用ゆ。渲淡とハ画刷毛などハ用ひすして、画筆に水墨を以て再三擦てこれを洒くを云。また幹淡とも云て、染法を何遍染法たると跡をあらハすやうにするを、南宗の趣意とす。近来、我国にても大雅堂無名、此法を用ひて大ひに世に鳴るなり。また北宗と云ハ、今世にいふ画工の画也。此宗の祖も唐の李思訓よりはしまり、宋の趙幹・趙伯駒・馬遠・夏彦之に至る。是ハ画の専門にして、乾坤中に象形するものを八画かさることなし。近世我が邦此法を用ひしハ、望玉蟾也。専ら写生をよくして、生物の意を写すを所詮とす。写生と雖、形似にはあらず、意のよく移るやうにさりやくに写すを云なり。

落款
画落成て姓名をしるし、印を打を落款と云。王侯貴人に呈するにハ、号或ハ字等を記すハ失敬なり。姓名を書へし。尤号の下に名を書けは許すこともあり。印を用ゆるにハ、天子ハ正中の

上位に印す也。他ハ位階によりて中段に印し、下段に印するなり。狩野家にはミナ下段に印す。いかにも謹嚴なるならはしなり。吾堂の如きハ上頭に印すれ共、孟浪にあるにあらず、所以あることなり。

印

印材ハ、天子ハ玉印・金印、諸侯ハ銀印・銅印、庶人ハ石印・象牙印・竹根印・牛筋印・鑄印等、其余数種あり。鈕ハ鳥獸・人物・連環等さまざまあり。関防を引首印とも条記ともいふ。俗にかたの印といふ。一材一面に二ツほりたる印を連印と云。俗に下駄印といふ。小判なりなる印を腰子形と云。四角なる印を直記といふ。小さき印を呂什とも戳児とも云也。其外毒印あり。両面印あり。六面印あり。さて、扇面、あるひハ金箔地、或ハ絹地等に印を打に、印肉乾きかたきもの也。其にハ、印を打たる上に珊瑚末をふりかくれハ、肉の油を珊瑚に吸納て、肉色もひとときハうるはしきなり。

画辞

古画に限らず凡て画を舒敷て、上より美濃紙等を覆て、下に敷たる画のよく見ゆるやうに影写を臨写と云。また、下に敷たる画の筆意に倣ふて写すを摸写と云。写し取りたる図を粉本と云。魯仙云、或云、自分稿画を粉本と云、粉本をうつすを移写と云。俗にまたうつし、孫写とも云。大なる図を小さく写すを縮写と云。何にても生物を其まゝに細密に写すを真写と云。又生物の意を灑落にうつすを写意と云。濃漿をせぬ紙を清紙と云。俗にふくさ紙といふ濃漿をしたる紙

を熟紙とも、礬紙共云。画筆五・七本も平にならへ刷毛の如くにしたるを排筆と云。俗に連筆と云。筆を洗ものを筆洗と云。硯を墨地共、墨洞とも、墨洩とも云。墨を玄雲とも、松心共、油龍とも云。朱肉を印色といふ。朱肉入を肉池と云。薄き墨を淡墨と云、こき墨を濃墨と云。画に染法を幹淡とも渲淡とも云。墨画を水墨と云、人物の墨画をこまかに描たるを白描と云、白描にこまかに染法をしたるを骨筆白描と云。灑落なる墨画の人物を引目と云、墨画の竹を墨君と云。画彩具にて描を描骨と云、俗につけたてと云。墨にて草花などを輪郭を画たるを双鉤と云、双鉤に彩色するを鉤染と云、鉤染の念を入たるを鉤縁と云。彩色をするを着色とも、顔色・没色共云。うす彩色を淡彩と云、こき彩色を濃彩と云。山水の極彩色を青緑と云、至てこまかなる画を密画と云。すくれてよく出来たる画を合作と云。此邦にてハ集画を合作と云なり。会日等に持参する画を兼画と云、相思画をハ春画と云なり。

山水の写生

唐山の古人も皆、真の山水を写して山の真の意をとることを専とするなり。李思訓は海外の山をうつし、董源ハ江南の山をうつし、米元暉ハ南徐山をうつし、李唐ハ中州の山をうつし、馬遠・夏珪は銭容山を写し、趙吳興ハ雪君山を写

し、黄子久ハ海虞山を写すなり。ミなそれくの山の真景、四明の造化、時々の変、朝雲・暮靄・煙・嵐・陰晴の真意をうつす事なり。

画訓

郭熙「画訓」あり。山も一ツの山の形状ハ数百品にかハる也。此所に居て此山の形状をうつしとりて、十歩移てまた此山を看れハはや其山の形状かはり、十歩あとにて写したる山の形状とハ同じからず。二十歩移て此山を見れハ、又山のかたちかハりて同じからず。三十歩移て又變り、四十歩、百歩にて山の形状の變ること、斯の如くなる物なれハ、山の形状ハ此方より看る処によりて其形状さまゝに變る事故、一ツの山の図にても数百品にかはりて、面白く写得ると云り。故に大雅堂か写したる「百富士」の図あり、偏く世に人の知る処なり。是不二ハ一の山なれとも、大雅堂の看写したる処の百品に變りたる故に、百景の不二山の眞の勝景を写し得しもの也。これも不二の山に限りたるにハあらず。外々の山も皆、斯の如くに一山を以て数百の形状ある也。これを用て郭熙か「画訓」を知るへし。又其一山の中にも、春夏秋冬の粧ひ變りて同じからず。春の山ハ煙雲聯綿て笑ふか如く、夏の山ハ蒼翠として嘉木繁張て満るか如く、秋の山ハ明淨揺落して粧ふかことく、冬の山は惨淡にして睡るかことし。夏ハ二葉を生し、秋ハ紅葉す。夏ハ急雨をおび、冬ハ雪をいたたき、四時の氣候に随ひて時々粧ひのかハること、又斯の如く数十品の景色をなす故に、一山にても数百のおもむきあると云り。

山水の名

山の尖たるを峯といひ、平なるを頂といひ、円なるを巒といひ、相連を嶺といひ、穴あるを岫といひ、峻壁なるを嵯といひ、嵯の間・嵯の下を岩といひ、路と山と相通するを谷と云、通せざるを峪と云、峪中に水有を溪と云、山水を夾を澗と云、山下に洑有を瀨と云、山の間平坦なるを坂と云、水中の怒石を磯と云、海外の奇山を島と云、山の頂を露頂と云、山の根を露根と云、山のがハのめぐりを輪郭と云、大なる皴を石紋と云、小皴を皴と云、皴の見えざるを遠山と云なり。

三遠

山水を写すに三円の法あり。ひくき岡阜或ハ林などの何処までも相つゝきて遠く見ゆるを平遠と云。又、高き山の下より高き山の頂を望み見るを高遠と云。又、山の前より後の山の谷などの深く折りまかりたるを望み覗るを深遠と云。是を三遠と云也。高遠の色ハ先づきれい也。深遠の色ハおもくこもりてくすむ也。平遠の色ハきよきもあり、又、こもりたるも有也。高遠の山水にあしらふ人物ハ勢長く画くなり。深遠の山水の中の人物ハ勢短かく也。平遠の山水の中にある人物ハ小少かくへし。又、郭熙か三遠を論するあり。近き崖よりひろき水を隔てゝはるか向ふの山をのそミ看るを、潤遠と云。たとへハ、住吉の浜辺より淡路島を望み見るやうなる形を云なり。又、朝霧或ハ雨雲あるハ、霞などの多くなひきて何処の山か何となく分りかたなく、山の形状のとり処なきやうなるを、迷遠と云。遠方の山を見れば、景色絶て山の皴な

と見て分らず、樹なともたゞくろく見ゆるを、幽遠と云。これを初の三遠に合して六遠の法と云なり。

画南北の訣

山水・花鳥・人物にかきらす、すへて画を灑落かく計りを文人の画と云にハあらず。又行家の画も、細密の画はかりにて風韻のなきと云にもあらず。風韻と云ハ自然の氣韻なるもの故に、別に求るにあらず。夏の山を写せば、自身か夏の頃此山水の中に居て、暑などを凌て居る氣になりて写せば、夏の自然の趣意の能写る也。是則自然の氣韻なり。是も山水にかきらす、花鳥・人物、皆此意趣ある事なれば、おして知るへし。錢舜舉・李龍眠・趙子昂等の画ハ、南宗なれとも皆青緑精密の画にて、澆墨草筆ハ專とハセざるなり。又、牧溪・玉潤等ハ、北宗の画なれとも、澆墨草筆を專とする也。又、馬遠・夏珪は淡彩の精工を以て名高し。

山水画題

画題ハ大低古人の書たる題を用るなり。唐山にてハ命題と云て、画をかきにかゝらざる先に題をまふけて後に画こと也。しかし、題の文意に縛られて文句の通りはかりかきてハ、画の趣向うすき故に、氣韻すくなし。只題の文句ハ規矩にして、文の外の余情の深くあるやうに画くこと也。譬ハ春山仙隱の図を画けば、春の山なれば融怡として雲烟などかり、溪谷にハ春花などの咲て有に、自身か其山水の中に居て、仙人になりて四方の山の氣色をなかめて樂みある心になりて画かけは、自然に其神を得て能く風韻移

りて、意味大に深長なり。外もミな此意を用ゆること、をして知るへし。山水ハ咫尺の中にも千里万山の氣韻も筆下に生ずる也。左に載する処の画題の上に、或ハ黄子久、或ハ王叔明とあるハ、其人のかきたる画題也。黄子久とあるハ、黄子久かかきたる画題也。其余ミな、おして知るへし。

春の部

列松年 春山仙隠

草木も青々とほへこもりたる中に、人家の二

・三軒ありて、別世界のおもむきを書也。

王叔明 桃溪仙舸

両方のきしにハ桃の花咲ミたれたるに、流れ

にハ舟をうかめて(こめて)楽しむおもむきをかく也。

黄子久 春山漁隠

柳なども青々とほへこもりたるに、入り江に

ハ舟をうかめて魚を釣りてゐるをかくなり。

同 春江花塙

平遠の山水に入江ありて、少高き岡に春花の

咲たる趣をかく也。

同 春溪帰棹

山の谷あひにゆさんに行きたる船に、童子な

との棹をさして帰る趣を画くなり。

同 桃溪仙隠

山の谷々にハ桃の花いくゑともなく咲ミたれ

て、仙人などのすみ家ある趣を画くなり。

同 柳市桃源

桃の林の中に柳などの青々とほへたる中に、

人家の有をかくなり。

同 春林列岫

こたかき山のいくつも有に、草木のはへこも

りたるをかく也。

同 柳浪漁歌

柳など多くはへこもりて緑をなしたる中に、

魚をとる歌などの聞ゆるやうな趣をかく也。

閻立本 西嶺春雲 高き山に霞のかゝりて奥深

く見ゆる趣をかくなり。

王維 春谿捕魚 山の谷間の流にて漁夫の鮎

などをとる趣をかく也。

趙幹 春林曲隴 平遠の山水に少高き岡の入

りまかりて、樹木など多く有趣をかく也。

韓滉 山邨春社 野夫の多くあつまりて酒を

呑ミ、酔て諷たり舞ふたりして楽しむ趣をか

く也。

黄荃 花谿仙舸 山の谷々に桃の花咲ミたれ

たるに、流れに舟をうかめて楽しむ趣をかく

也。

郭忠恕 春山仙宅 山水の中に人家のあるに、

凡ならずして世界の違ひて別なる趣をかく也。

同 桃溪龍舸 流にハ結構なる屋形舟に美

人など、兩岸の花などを見て楽しミ居る趣を

かく也。

同 仙峯春色 山の高く峙たる処に似すし

て春霞などたなひきて、甚春色なるを書なり。

趙韓 仙居疊翠 山も樹も青々と幾重ともな

くはへかさなりたる中に人家有趣をかく也。

夏の部

李昇 蒼山避暑 青々としたる木のかげにて

人物のすゝみて暑をしのぎある所をかくなり。

董源 夏山深遠 山に雲煙まとひて何ほと

深山やら知れぬやうなる趣をかく也。

郭忠恕 夏山仙館 雲の峯などありてものさひ

たる人家のある趣をかくなり。

趙松雪 山林避暑 人物二・三人木のかけにて

すゝミ暑を凌きある趣をかく也。

秋の部

王叔明 秋溪覓句 人物か山の谷あひに遊ひて

詩などを作り居る趣をかく也。

黄子久 秋江間棹 入江に舟をうかめて棹さし

て楽し居る趣をかく也。

同 秋江帆影 入江に帆かけ舟などの行か

ふ趣をかく也。

同 秋江漁棹 枯葉の芦の中に獵師の舟さ

してあちこち行かふ趣をかく也。

同 員嶠秋雲 山の峯の幾つも重りたるに

雪などまとひて奥深く見ゆる趣をかく也。

同 秋山深処 行てもくものさひしくか

きりなき趣をかく也。

王叔明 秋江晚眺 秋の暮かたの物さひしく、

尚又夕陽のうつり、鴈などの飛る趣をかく

也。

閻本立 秋嶺帰雲 高く秀てし山に雲のかゝ

りて、尚又淋しき趣をかくなり。

荆浩 楚山秋晚 楚の国にハ高き山の多き処

なれハ、秋の紅葉など一かた風韻ある趣をか

く也。

関仝 層巒秋靄 山の峯の段々と重りたるに、

霧などかゝりたるやうにほんぼりと見ゆる趣

をかく也。

同 秋山凝翠 初秋のころ草木共に青々と

したる趣をかくなり。

黄筌 蜀江秋浄 蜀の国ハ高き山はかりの国

なれハ、濯錦江など紅葉の散流れて物淋しき

趣をかく也。

范寛 江山秋霄 月さへて入江などにうつり

て、ものあはれにして静なるやうをかく也。

王詵 万壑秋雲 長くつゞきたる谷間に雲の

かゝりて奥深く見たるやうをかく也。

李昭道 秋山無尽 山の木葉もミナ紅葉してか

きりなくさひしきやうにかく也。

王叔明 松壑秋雲 山の谷合に松の多く生へた

るに雲のかゝり、奥深く見ゆるやうにかく也。

趙仲穆 秋山訪瀆 山のなかに隠居してゐる人

を尋ねて行趣をかくなり。

呉道元 秋山放鶴 秋の山中にて人物の鶴をは

なしてゐる趣をかくなり。

李思訓 江郷秋晚 入江にかゝり舟など多くあ

りて鴈などの飛てゐる趣をかく也。

李思訓 冬の部

寒江晚山 風もすさましく吹き、木す

へ計り山に有て、入江にハ氷などはりつめ、

いかに寒き体をかく也。

黄子久 露風帰旅 朝風のいたく吹わたす中に

旅人の往来してゐるやうをかく也。

同 雪山旅思 一面の雪の山に旅人の往来

してゐるに、寒気のためかたき趣をかく也。

同 楓林寒岫 林に散り残りたる木葉も少

しハ有て、山のくきも枯て寒ささそふ処をか

く也。

王叔明 寒山晚雲 木葉もちりて梢はかり残り

たるに、くれかゝる煙雲のかゝりたる趣をか

くなり。

同 寒山晚雪 山ハ一面に雪の降りつもり

たるに、鳥などのねくらを尋て帰る趣をかく

也。

王維 雪谿 山の谷々に雪の積りたる趣

をかく也。

張僧繇 霜林雲岫 山のくきに白雪まとひて、

林も吹あれ、いかさま寒さうなる趣をかく也。

王詵 蜀道寒雲 山のうへに山重りてけんそ

なる山道を馬に荷を付たる人物多く、又、山

の前半ハ雲かゝり寒さうな趣。

雑の部

黄子久 柳塘漁舸 小高き磯はたに柳木などは

へこもり、流にハ魚つる舟とある趣をかく

也。

同 溪閣松声 山の谷間に松などはへしけ

りたる中に、楼閣ある趣をかく也。

同 煙嵐雲樹 煙と嵐と雲とハ皆書やう別

なれ共、是にハたゞ霞の間に樹の有趣をかく

也。

同 江山蕭寺 山水の中に寺の有趣をかく

也。

同 松坡晴嶂 そひへたる山のもとに松は

へこもりたる趣をかく也。

王叔明 山亭讌集 山のちんに人多く集りて詩

など作りゐるやうすをかく也。

同 江亭遠眺 浜辺の亭より流れのかきり

なく、遠きなかめの趣をかく也。

同 暮山帰旅 夕陽の山の中に人物の家に帰

るやうをかく也。

同 松壑雲泉 山の谷々にハ松のはへしけ

りたるに、水の流などある趣をかく也。

同 松壑元言 松の有谷間に人物二・三人

よりあつまり、中に老僧の道をはなしてゐる

趣をかく也。

同 江亭晤語 入江のほとりのちんにて、

人物の二人相對していて話をしてゐる趣をか

く也。

同 深林静処 木の多く生へ茂りたる林な

れハ、人の往来ハ勿論、鳥も通ハぬ趣をかく

也。

趙白駒 瑤池仙境 瑤池ハ西王母の栖なれハい

かにも奇麗にて別世界の趣をかく也。

夏珪 晴江帰棹 雨はれて獵師ハ船に棹さし

て帰る趣をかく也。

盧鴻 盧嶽觀泉 ろさんの滝ハ至て高より落

る滝なるを、人物の見てゐる趣をかく也。

花鳥画題

清朝にてハ音の相通を以て画をかくこと多し。

たとへハ、浜辺の浪のうちたる処に鶴のゐる画

をかきて一品当朝之図と題するなり。唐山にて

ハ、文一品の官位の服の衣紋ハ、仙雀の補子

なり。故に一品ハ一浜に相通、当朝ハ当潮に相

通ふ。故に文一品官の朝廷に当するといふ意を

祝して、ひとつの浜辺に鶴のゐる画をかけて文

官の人を請ふに用るなり。

(※図版「蜂猴図」の説明)

蜂と猴とを画きて、侯に封せらるゝと云を祝し

て、是を封侯の図と云て、士官の人を請ときハ

此かけ物をかける也。

堂上白頭之図 堂上の堂と海棠の棠と、音相通。

白頭ハ父母の二親老て頭額の白髪を標して、

海棠の上に白頭鳥の雙棲たる画をかけて、父

母の、堂上にいつまでも孝命居らるゝと云を

祝して、堂上白頭と云て父母を孝敬するなり。

福祿寿之図 福と蝙蝠の蝠と音相通、祿と鹿と音相通、寿と樹と音相通を以て、蝙蝠と鹿と松樹とを画きて福祿寿を祝するなり。

玉堂富貴之図 玉蘭の玉の字をとり、海棠の棠と堂と音相通故、海棠を堂とし、牡丹ハ花の富貴なりと云を以て、玉蘭と海棠と牡丹を画て玉堂富貴の図と祝するなり。

一笑之図 竹のもとに犬のある画をかきて一笑の図と云ハ、笑の字ハ竹冠に犬と云字を書故に、文字を標して画くなり。

桃柳四燕之図 桃柳ハもとやなき也。四燕とハつはめの四羽飛てゐる也。四燕と賜宴と音相通を以て、朝廷より酒を賜ハると云を祝して、桃と柳とにつはめを四羽居る図を画きて桃柳四燕の図と云なり。

九臯鳴鶴之図 人の徳のふかくて名の高きを、天下の人々おし尊とむと云ことを祝して、深遠なる臯に鶴の鳴て居る図をかきて九臯鳴鶴之図と云て、人の徳の高を祝するに用ゆ。鷄群鶴立之図 昂々然として野鶴の鷄群の中に有か如しと云文意をとりて、人の徳の衆人にすぐれて高大なるを祝して、鷄頭に鶴を画て鷄群鶴立と云て、人徳を祝するに用ゆ。

余ハ略す。また水仙と桜を画て雙清図と云。

顔色具

金青 金青ハ石青とも云。即紺青なり。数品あり。色濃きハ質善く、堅し。故に今時の画家に用ひす。其余花紺青・硝子紺青の名のり、皆下品とす。

空青 空青ハ蘇青とも云。即群青也。此質細微にして、色残ハうるハし。故に画家に専ら是

を用ゆ。色の濃淡、好品・疎品の数もまた多し。礫子に膠水を貯て、指先にてよくときて用ゆ。

白青 白青ハ魚目とも云。即白鮮なり。是ハ群青の中より出て、群青より色濃くうるハし。是に次なる残青色なるを白二番と云。又其次なるを白三番と云。又其次なる白四番と云。一番・二番と云ハ画家の通言にして、好品・疎品を分つにハあらず。只色の濃淡の次第を分つ名と知るへし。用やう空青と同じ。

石緑 石緑ハ頭緑とも云。即岩緑青なり。数品あり。粒緑青・銅緑青等あり。其中に就て石緑の外ハ用ひす。石緑の中にも、頭緑俗に一番と云。是ハ質堅く善し。故に疎品なりとす。用ひやうハ礫子に膠水を貯へ指先にてときて用ふなり。緑青をぬりたる上へ並ひ溟淡をすするに付かざるものなり。心得有へし。

漆緑 漆緑ハ頭緑に黒子あるを云也。用やう頭緑に同じ。

枝条緑 枝条緑ハ官緑とも云。俗に青二番と云也。頭緑より質微細にして、色もうすぐうるハしき故に、専ら是を用ふ。好疎の品多し。随分好品をゑらみて用へし。用ひやうハ頭緑に同じ。

高三緑 高三緑ハ俗に青三番と云。枝条緑より質又微細にして、色も又薄くうるハし。用ひやうハ頭緑に同じ。

白緑 白緑ハ高三緑よりまた質微細にして、色もまた薄く此白緑に数品あり。白緑の次に薄き色を白二番、又其次を白三番と云。此一番・二番と云も、好品・疎品と分つ名にあらず。只、色の濃淡の次第なり。余ハ準して知るへ

し。用やう上に同じ。

黄緑 黄緑ハ古ハ無き物也。近年其製法を得たり。専ら用ひ質、石緑と同じことにて、黄子あり。次第、石緑と同じ。用ひやうもまたしかなり。

代赭石 代赭石ハ質甚堅く、色黄赤色にて、人物などの肉色に着てよし。好品・疎品あり。近来此邦諸処より頗る色うるハしく、花やうなるを上品とす。色黒くして鉄の如くあるハ下品なり。用ひやうハ、礫子に淡膠水を入れて、力のいらぬやうによく摺り、乾かし、重て並ひ用ふ時に清水を点して、指先にてときて用ふなり。是に雌黄を等分に摺合したるを赭黄といふ。是も人物の肉色等に着てよし。

銀朱 銀朱ハ朱の極て好品を云なり。水飛して用ゆ。色尤赤く、濃彩に用ゆ。水飛するにハ巨盞の中に清水を入れて、朱を乳て、また清水を巨盞の中にミつるほど入れて、置こと半日あまりにして見れハ、朱ハ下に滞りたる朱の上に黄子うかむ也。其時に下に滞りたる朱の動ぬやうに巨盞をかたむけて、上にかミたる黄子をながし去り、又初の如く清水を巨盞に滞るほど入れて、乳棍にて擦乳てしつめむなり。如此すること一日に兩三度程して、日数三・四日計りもするなり。其時ハ朱の上につみたる黄子と、下に滞りたるおもき処を去りて、中程のとろくとしたる所を礫子の中に乾かし、付置き、並ひ用る時、又濃膠水を入れ、指先にてよく乳て用るなり。

猩胭脂 猩胭脂ハ形丸く、質ハ綿を紅色に染たるもの也。本朝画史にハ蘇木汁にて染たる物也とあり。其紅色をしほり出して用るなり。

調するにハ巨蓋の中に熱き湯を貯へて猩猩脂を入れて、竹箸にてよくしほりて、しほりからの綿のかすをハ脇へ除けて、紅汁を土瓶に白湯をたきらせて、土瓶の口にかけての巨蓋を位置、重湯にして蒸し詰て乾かす也。能くかわきたる時ハ巨蓋中に潤ひありて、乳汁のことにねはりあるハ好品なり。凡て猩猩脂を用ふにハ膠水を入れず、清水を点して乳て用ゆる也。色大に美なり。扱、猩猩脂を緒索にほとこし、画なりて後に其色脇へちつたり、又色ぬけ去りて白地になる事あり。猶口授あるへし。芥子園画伝に胭脂手染ることなかれ、手に染たる色去りかたし、是を去るに油を以て拭へハ速に去る也。

胡粉 胡粉に数品あり。就中好品なるハ面粉・傳粉・天人面粉此処落書是を用るにハ乳鉢の中へ粉を入れ、乳棍にてよくすり極細末にして、膠水を一滴つゝ点してハ又すり、漸々やわらかに乳てねること千万遍に至りて、餅子のこどくにして、乳鉢の中へ幾度も打付て円るを、是を餅子ねりと云。さて、土鍋に清水を貯へて火にかけ熱湯にし、其中へかの餅子練を其まゝ投入て、暫すると、胡粉に前に加へし膠水を去りて、土鍋をかたむけて熱湯をなかし捨て、胡粉ハ其まゝ水飛して碟子中に晒し、乾して、並ひ用ひる時に膠水を点して、指先にてときて用ふなり。 下図

雌黄 雌黄と靛花を当分に合たるを、草緑とも草汁とも云也。また雌黄四分に靛花六分合たるを老緑と云。又、雌黄六分に靛花四分合たるを獺緑と云也。何れも碟子に膠水を貯へてよくすり、熟和したるを用ふ。

靛花 丹 土黄 紫花 一名燕支、俗ニ紫土ト云。
雄黄 一名鶏冠石 藤黄 烟墨 雲母
金粉 銀粉 泥 泥

右、文鳳の「漢画独稽古」のうつし。

熟字

輪郭「フチマハリ」線「ステカキ」臨写「ミウツシ」模写「スキウツシ」点画「テンクワク」弱腕「フテヨワシ」精密「ネン入ニコマク」痴弱渋滞拙劣「ヘタ」心手相応「オモフトオリニカケル」灰筆「ヤキフテ」朽木「同」櫟「同」洗淨「ファイテシマウ」添削「ナホス」生徒「チイコニン」単一「テカロク」起手「カキハシメ」毫厘「スコシ」偏曲「カタヨリマカル」位置「ツトリ」布置「同」幀「ワク」黄漿「トウサ」鑿法「同」注意「キヲツケル」コト「ロツケ」遵勁「テツヨク」遲疑「トコホル」箇々断々「ツキく」屈曲「マカル」臨本「テホン」着実「シツカリ」順序ニ臚列ス 漸次ニ進歩ス 迅速ナル事臂ト券ニテ払フカコトシ 習熟 口訣「テンジユ」間断「スキ」誤ヲ認得ハ一挙シテ拭ヒサリ 数回反復習練 熟練 絹本「キヌチ」水平線「ヨコスチ」直下線「タテスチ」平行「ヨコスチ」斜行線 概要「ヨウチ」 密接 正範「タトシキキソク」詭遇「法ハツレ」法方「シカタ」綿密 歪「ユカミ」切要一局ノ画「イチマイノエ」 毎 毎々 勾郭「ヘリカキウチカキ 輪郭也」躊躇「グツく」羅織 湊合シテ全面トス 分析「ワケホトコス」一掃ニ引ク 簡單「カロシ」沈実「ネンイレ」噴口「ハキクチ」贅線「イラヌスチカキ」渲滌

「クマトリ」渲暈「同」渲染「同」肋状筋「葉ノスチ」鋸齒形「葉ノスチ」明瞭「アキラカ」包裹 較量「クラヘハカリ」渾 特 目計「メブンリヤウ」平衡「ツリアヒ」套方「シクミ」伎倆 粗糙「サラツク」曖昧「ハツキリトセス」向背「カケヒナタ」向陽「ヒナタ」突起 凸起「同」凸凹「タカヒク」著 恰 交加「イリクミ」錯雜「同」稠密「コミアヒ」舒布「ノヘヒロケ」管「筆」樹幹「ミキ」比倫スヘキ景物ヲ增添ス 天真ヲ旨趣トス「但草花ナト真写」

墨氣模糊筆痕氣力ナシ 初ノ伝授ハ速ニ経過シ、足レリトセハ画術ノ基礎ヲ崩壊シ、其結構毛顛ヘラントスルニ至ルヘシ云々ハ、大厦ヲ構スルノ基礎ニシテ、是ヲ学ハサレハ絶テ十分広大ナル結構ヲ尽ス能ハスト云コトヲ、自ら理会スルニ至ルヘシ。

筆力蒼古 掃脱「ヤキ筆」脱却「同」摩擦 擦毀 施為「シアケル」落成「同」屋漏痕「ムラ」上「トウサ」 遠景ハ大氣ノ翳遮スル理ニ由テ、漸次ニ淡クシテ、総テ暗処ハ光処ヨリ甚早く溟滅スルノ理ナリ。 標準 乳棍 乳「エノグ」印ヲ打ス

行家建幃ノ画・文人韻士ノ画、範圍ニ縛ラレ、其果否ヲ知ラス。姑ク温故ノ一助トスヘシ。

(朱印)
「芦川齊篋書」

本田 伸 青森県立郷土館 研究主幹
青森県立郷土館 (〒〇三〇〇八〇二)
青森市本町二丁目八番四号